

蛭ヶ岳山荘通信 第55号

発行日 平成24年9月15日
発行者 北丹沢山岳センター
事務局 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
TEL042-687-4011
FAX042-687-3980

蛭ヶ岳北面の大崩地に防災対策が出来ないか？

神奈川県屋根と呼ばれている丹沢。かつて丹沢山塊の名で親しまれてきた。山域は東西40km、南北20kmキロの範囲に広がり、北は山梨県、西は静岡県にまたがっている。丹沢の最高峰は、蛭ヶ岳で高さ1672.6m。大正12年の関東大震災につづく翌年の丹沢山地域の地震で、西丹沢の山と谷は、ガレキで埋め尽くされた。その最大の被害は、蛭ヶ岳南側と北側の大崩壊、今も蛭ヶ岳北面の仏谷を中心に登山道近くで毎年崩壊が進んでいる。全国の多くの山々では、国立公園、国定公園、県立公園でも砂防対策が進められている。残念ながら、ここの蛭ヶ岳の崩壊地では、まだ対策も殆どされず放置されたままである。多くの登山する人達は何かと対策が出来ないかと、苦言をする人も多い。

崩壊地写真



32年ぶりに蛭ヶ岳山頂で、箱根ヒメボタルを発見

蛭ヶ岳山荘管理人が山頂稜線上に舞っている3匹の箱根ヒメボタルを発見しました。蛭ヶ岳山頂から夏の夜空に舞う箱根ヒメボタルは32年以上前までは見られたが、それ以降発見されていませんでした。横須賀市自然史博物館の大場信義先生の報告によると、1980年7月14日に蛭ヶ岳山頂で舞う箱根ヒメボタル姿を発見したとのことです。NPO北丹沢山岳センターで2003年～2005年にかけて調査しましたが発見されませんでした。この間、コース途中の「黍殻山避難小屋」では毎年7月下旬に見られていました。蛭ヶ岳山荘の梶原管理人によると、蛭ヶ岳山頂ではシカの被害も少なくなり、下草の成長も良く環境が少し改善されてきたのが、箱根ヒメボタルの生育環境に好影響を与えたのではなし、かと思われるとの事です。かつては丹沢山塊稜線上のどこでも見られた乱舞する箱根ヒメボタル復活の夢を見たいものです。ちなみに箱根ヒメボタルは7月中旬から7月下旬に見られるとの事です。

問合せは蛭ヶ岳山荘・090-252-3203
(衛星電話)

“追想” 蛭ヶ岳

白皚々たる熊木沢の奥に巖然と聳ゆる1,672mの峰こそ、神奈川県の最高峰蛭ヶ岳であり、丹沢山塊の盟主の偉容を誇っている。

暖かい南の海で生まれたというその生い立ちは興味をそそる。神奈川県立博物館編・有隣新書「南の島からきた丹沢」に詳述されている。

私が山北町の講演会で聞いた、東海大学付属相模高校の未包鉄郎先生のお話は、「今から1,500万年前、伊豆や丹沢は、南の暖かい海に浮かぶサンゴ礁の発達する火山島として存在していました。島の周囲ではしばしば激しい海底火山活動が起り、大量の火山灰が海底に積もりました。やがて今から1,000万年前頃から、伊豆や丹沢の島を乗せて“フィリッピンプレート”が移動を開始し、そして今から500万年前頃、とうとう丹沢は日本列島に衝突しました。やがて今から200万年前頃、丹沢の後ろに伊豆が衝突して、丹沢とその周囲の海底を持上げ、山脈に作り変えていったのです」と、このようにして出現した丹沢が、長い年月を大自然の偉大なる芸術によって、今日の丹沢を私たちに至上の宝物として贈ってくれたのです。



蛭ヶ岳という山名はどのように付けられたのでしょうか。『かながわ・山紀行・植木知司著・かもめ文庫』はこう語っている。山頂に薬師如来を祀っていたので別名薬師岳ともいう。坂本光雄氏は『丹沢の山と渓谷』で「薬師が使った山頭巾を昔から“ヒル”と呼んで、山での仕事はもちろん、物々交換で米などの穀物を計るのにも使い薬師にとっては欠くことのできないものであった。この山頭巾の形が、蛭ヶ岳の山容によく似ていたのだから、この名が付けられたのであろう」と記している。

また、『山の神の民族と信仰・丹沢 桂川 足柄・佐藤芝明著・中央公論事業出版』によれば、丹沢木地師の足跡を訪ねての中で、「蛭ヶ岳の名は、『蛭谷』から来ているように思えるのである。滋賀県永源寺町の『蛭谷』は木地師の聖地であり、西から関東に進出した木地師達は山容が鈴鹿山系に、標高も似ていることから『ヒル岳』と名付けたのかもしれない」と述べている。

私がこの蛭ヶ岳を始めて訪れたのは昭和14年の秋であった。相模野会の古い会報とアルバムを開いて見た。昭和14年11月号の「ど

んぐり」の報告はこうだ。「月夜の行軍で満員の札掛の山の家に到着翌10月1日は午前4時に出発、一路塔ヶ岳へ…塔ヶ岳で朝食を済ませてから、山小屋建設の勤労奉仕が始まり約一時間即製人夫となって愉快地働き、次の丹沢山へ、山頂の櫓で記念写真そして蛭ヶ岳で昼食、昨夜の睡眠不足を補い、姫次目指し、水場の冷たい水でのをうるほし、それから鳥屋までノンストップ」とあり、最初の蛭ヶ岳の思い出は頂上での午睡であったとは。……

昭和36年に山荘が建設され、毎年お正月は尊仏山荘・蛭ヶ岳山荘・原小屋山荘・道志温泉・山中湖の至誠荘が我が家のお正月定期コースであった。

蛭ヶ岳山荘を守ってくれた人々の笑顔が走馬燈のように浮かんでくる。山荘建設の立役者「青根の石工佐藤二三九さん」、私も水場探しにも苦労したが、よいところはみつからなかった。

母鹿が野犬にやられて、残された子鹿を育てたNさん、チビと名を付けて可愛がった。大きくなってチビと呼ぶとこっちを向いた。そのチビももう余命を終わった。TVKに出演した堂々たるボス鹿もとうに姿が見えず、すべて追憶の彼方へと消えていった。

しかし、頂上からの絶景は朝に夕に私を離さない。洋々たる相模灘から朝がやってくる。怒涛のごとき雲海にぼっかり浮かぶ松洞丸、その上に悠久の富士山が紅に燃ゆる。落陽もそれに増して大自然の神秘さをしみじみと味わせてくれる。冬の霧氷、白銀に輝く南アルプス連峰、やがては宮ヶ瀬湖が虹の大橋を映してキラキラと輝くことであろう。

30年来の長い間私達を暖かく迎えてくれた山荘が再建された。かずかずの思い出のある山荘の再建はうれしい。“だが” 笹が枯れ、ブナが倒れ、花が盗まれ、鹿が悲鳴をあげて餓死をしている。これでいいのだろうか。山は私たちの豊かな生活の犠牲者なのだ。宮ヶ瀬湖の一滴は、“蛭ヶ岳”の涙ではないだろうか。暖かい山荘建設と共に100年計画でもいい、あの頂きにブナの森を贈ってあげられないだろうか。



文、写真は横浜山岳会委員の故奥野幸道さんからいただきました。

蛭ヶ岳山荘今昔

故 植木 知司

蛭ヶ岳頂上にいつ頃から小屋があったかは知らない。山が高く交通の不便の頃は日帰りにはできない山。昔、信仰の山だったので登拝のために山頂付近ではお籠りしたことは十分想像できる。お籠りは岩場であったり、簡素な草小屋であったかも知れない。かつての日向修験の奥駆けは日向を起点に大山から丹沢表尾根を通して、塔ノ岳から蛭ヶ岳を越える難コースであった。昭和13年に発行された『丹沢』（秦野山岳会）には武州国多摩郡の竹内富造老が蛭ヶ岳・不動ノ峰・塔ノ岳を丹沢三山として入峰35日の難行苦行を続けたと記されている。この山がいろいろな信仰を持った人達に登拝されたことは山頂にあった神仏が、そのことを物語っている。毘盧遮那仏・薬師如来・御岳神社・竜波羅大神・八海山大神・三笠山大神等である。毘盧遮那仏を祭ったから蛭ヶ岳。薬師如来



蛭ヶ岳の小屋（昭和8年）

を祭ったところから薬師岳の山名説さえある。

昭和の初めの頃に山頂に登山者が宿泊できた山小屋の貴重な写真

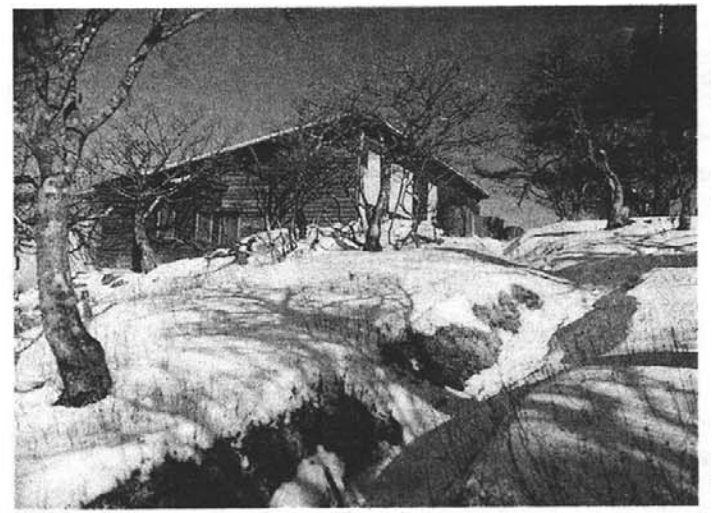
言う、洵に似つて、憐れな状態となって了った」とある。その頃の山頂にあった蛭ヶ岳小屋の荒れ果てた姿が目に見えるようだ。どんな人達が泊まったであろうか。

この山に登山者として最初に登ったのは梅沢親光とされている。『山岳』第11年 第3号（大正6年）の「相州蛭ヶ岳」が最初の登山記録である。

私が初めてこの山に登ったのは、昭和26年の5月だった。鬱蒼としたブナの巨木の下にスズタケが生い茂っていたことが思い出される。日本山岳会のマナスル登頂と井上靖の小説『氷壁』の影響もあってか昭和30年頃から登山ブームが起これり、この山も多くの人に登られるようになった。それに拍車をかけたのが昭和30年秋に開催された第10回国民体育大会・登山である。その準備で塔ノ岳に神奈川県によって尊仏山荘が建設され国体コースが整備され、今までのヤブ尾根がぐっと歩きやすくなった。

その後の昭和35年5月には丹沢が県立自然公園に指定され、登山者は急増した。そのため登山者の安全をはかるために、この山に山荘の必要性が叫ばれるようになった。神奈川県ではそれらの要望に応じて昭和36年1月、山頂に県立蛭ヶ岳山荘を建設。管理運営を県体育協会とした。120人収容できる木造2階建て、総工費468万円の初代蛭ヶ岳山荘の誕生である。山頂にできた山荘だけに登山者に大いに利用された。しかし昭和50年代に入ってから登山ブームが衰退をみせ始め、年と共に山荘は老朽化が進み、加えて管理人の不評もあって利用者は年々減少するばかり。それに追い打ちをかけ

がある。丹沢と深い関係のある横浜山岳会が発行した『創立六十周年記念誌』（平成3年3月刊）である。同誌に故石川次郎氏は



旧蛭ヶ岳山荘

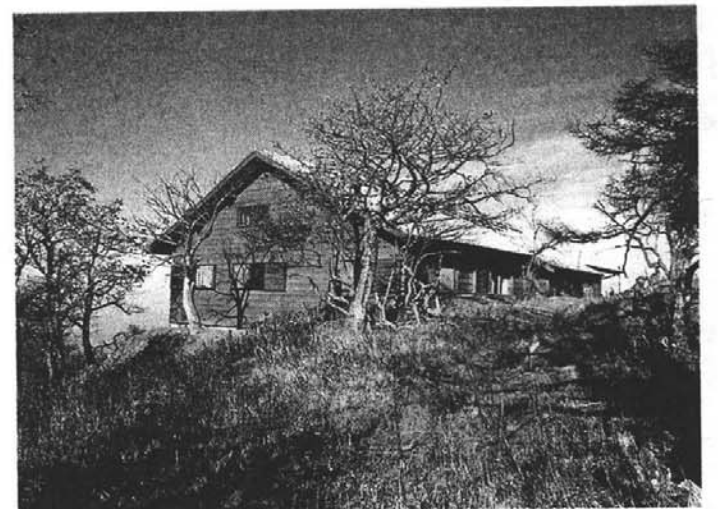
4枚の昔の丹沢の写真を見せている。

その1枚には簡素なトタン屋根の小屋の前に2人の登山者の姿がある。写真の説明に「蛭ヶ岳頂上小屋 昭和の初めの頃（昭和3年頃か）津久井郡の三村共同で作った山小屋。床もなく雨よけの簡単なもの。小屋前に三角標石が見える。現在はこれが見あたらず。昭和30年、現在の小屋が建った時行方不明となる。位置は現在の小屋の炊事場付近」と記されている。

もう1冊が同会員の『雲水伴侶』石田兵一写真集（平成5年12月刊）。昭和8年の撮影で2枚掲載されている。ありし日の山頂の山小屋の姿である。

坂本光雄『丹沢山魂の山名について』（山と溪谷・昭和13年5月号）には「近頃この山の嶺に御岳神社と崇められた立派な神祠が建てられたが、向き合いの蛭ヶ岳小屋は最近益々荒廃して、小屋とは名許りな柱とトタン屋根を数枚残すのみと

るように平成6年と7年の2回にわたって台風で屋根が吹き飛ばされるという被害を受けた。山荘を管理していた県体育協会では平成



現在の蛭ヶ岳山荘

7年に山荘を閉鎖。廃止取り壊しを決めた。

しかし、そんなニュースを知った登山者や山荘用地を提供している津久井町から山荘存続や管理態勢を変えての運営を求める声が県体育協会に次々と寄せられてきた。それらの声に応じて、一般登山者等からの再建カンパも含めて全面改築することとなった。総予算7,200万円、一般募集は目標額を500万円とし、一口500円とした。一般の人たちの関心は高く目標額をはるかに越え、平成9年11月にオープン。41人収容の木造平屋建てである。平成10年3月までの暫定期間を藤野町の力武通博氏が管理人を担当し、同年4月からは蛭ヶ岳山荘管理委員会（代表杉本憲昭）が「自然環境に配慮した利用しやすい山荘」をモットーに管理・運営に日夜努力し、登山者に大変喜ばれている。